第十八卷　第四號　六二六

オリントスの陷落（下）

原　隨　園

序
一、オリントス
二、アテナイの動向
三、アンタルキダス條約
四、ギリシヤ再生の力（以上前號）
五、マケドニアの性格
六、マケドニアの進出（以上本號）

五、マケドニアの性格

ギリシア諸市の間において、生活樣式が跛行してゐたことは既に一言した如くであつて、就中西北部においては文化が昔ながらに素朴未熟であつた。

マケドニアはハリアクモン Haliakmon 河とアクシオス Axios 河との間を主部とし、上マケドニア he ano Makedonie と下マケドニア he kato Makedonie とに分たれる。下マケドニアとはピエリア Pieria ボッチアイア Bottiaia などハリアクモンの下流地方をさし（cf. Hdt. VII. 173）、上マケドニアは之に對する山地方面を呼んだもので、リンケスタイ Lynkestai ペラゴナイ Pelegonai オレスタイ

Orestai エリミオタイ Elimiotai ペルライボイ Perraiboi 等の住地をさしてゐる (Hdt. VII. 128. Thuk. II. 99 Strabon. VII. p. 337.)。そしてマケドニア人の本據は山地方面にあつて (Hdt. VIII 138)、マケドニア人とボッチアイオイとは區別されてゐたこともあつたが (Hdt. VII. 127) 此の河の下流の豐饒な地方からボッチアイオイ、ピエレス等の人々を驅逐してマケドニア人が占領したものである (Thuk. II. 99)、マケドニアがギリシア民族によつて占據されてゐたことは、少くともギリシア民族が南下した際に足溜りとなつたことは疑はない。地名や人名や月の名やその他の傳說にその名殘をとゞめてゐる (Kaerst. Geschichte des Hellenismus I² S. 159)

ここではマケドニアがギリシア人であるか否かが重大であるのではない。マケドニア人がデルフォイのアンフィクショニア Amphiktyonia にも加はらず、オリンピアの競技にも參加せず、全くギリシア人の生活とはかけはなれてゐたといふことに意味がある。卽ち彼等の生活は、城塞を中心とした都市生活に入らないで、かつて多くのギリシア諸市のあつた如くに、又、後のアイトリア、エピロス等の如くに、無防禦のまゝで生活して居り、部族に分れておの〳〵その酋長をいたゞくといふ有樣であり (Thuk. II. 99)、外部とは全く遮斷されて自給自足的な生活を營んでゐた。マケドニアの古都アイガイ Aigai は古名エデッサ Edessa の意譯であつて水に富んで居ることを示して居り (Hoffmann, Die Makedonien S. 257)、ミダス Midas 王の國に近きところと考へられてゐるから (Hdt. VIII. 138)

極めて豊饒の地であつた。又新しき都ペラ Pella は、アクシオスの支流リディアス Lydias 河が航江しうる地點にあるから(Strab. fr. 20, 23)、是また生活に恵まれてゐたのである。かくの如くにして、ギリシア人との交渉を不必要としたのであつて、それがギリシア人をして彼等をバルバロイと考へさせた所以であつた。

かくの如き農牧を主とした生活は、なほフィリッポス二世の頃までも續いてゐたのであるが、然し彼等が或はヘラクリダイ Heraklidai であるといふ信念をつよめ、オリンピアの競技にも出場するに到つたことは(Hdt. V. 22)、たとひそれが豪族内部の動きであつたとはいへ既に彼等民族の生活自體も漸を追ふて蠢動の氣配を示し、やがては山地より降つて平原に出でて都市生活に入らんとする潮流の波頭と觀することが出來る。かゝる變化はアミンタス Amyntas の子アレクサンドロス一世の頃卽ち波斯戰役の頃から顯著となつて來た。彼が非禮なるペルシアの使節を殺戮したといふ話は(Hdt. V. 20-21)、恐らくマケドニアがアテナイに忠實になつた以來の傳說をヘロドトスがそのまゝ傳へたものであつて(How & Wells II. p. 7)、實際からいへば、アレクサンドロス以前は微弱なる地方的な小酋長にすぎなかつたのであらう。然しながら初めてオリンピア競技に出場したのは彼の時であつて、それは王統がヘラクリダイであるとして承認されたからである。このことは、ペルシア戰役を境として、北方におけるマケドニアの勢力が、ギリシア諸市の間に、國際的承認をえたことを意味するのであつ

て、國力の充實したことが明白である。卽ち彼は、後にプラシアス Prasias 湖附近の鑛山を經營して毎日一タラントの銀を收得したと傳へられてゐる(Hdt. V. 17)。鑛山經營は、アレクサンドロスの時代の鑄貨の豐富なりしことと(Gardner, History of Ancient Coinage. p. 275)緊密な關係において眺められなければならない。卽ちマケドニアがギリシア風の文化に追隨しようとしたときは、彼等の生活そのものがバルバロスな生活からぬけだして來たときであつたのだ。

プラシアス湖が今、どの湖に比定すべきかは問題であるとしても(How & Wells II p. 6)、それはストリモン Strymon の流域に求むべきであり、換言すれば、アレクサンドロスの頃にはその領域が東は既にアクシォス河を越えて東に伸張したことは確實であるといはねばならぬ(cf. Thuk. II 99)。かくの如き發展は、マケドニア自身のもつ活力によるものであつて、ペルシアの侵入と及びその敗退とが、マケドニアの發展に絕好の機會を與へたものである(cf. Justin. VII 4.)。

ペロポンネソス戰役の末期において、アレクサンドロスの孫アルケラオス Archelaos が卽位してからは、彼に先だつ八代の王よりも偉大なる業績をあげ、市には防備をほどこし、道路をつくり、騎兵を組織して軍備をととのへ(Thuk. II. 100)、ほゞ全國を中央集權的統制の下においた。アレクサンドロスの時に擴張されたるマケドニア王國の基礎はアルケラオスの時に充實確立したといふべきであ

る。

アレクサンドロスとアルケラオスとの間に卽位したペルディッカスの時代はペロポンネソス戰役の前半に該當する。アテナイ海上權の發動は、トラキア方面にも向ひ、四三六年にはアンフィポリス Amphipolis を建設してパンガイオン Pangaion の鑛區を確實に手に收めた。之はストリモン流域に伸張して來たマケドニアとの抗爭をさけ難くしたのである。又ペロポンネソス戰役をさけがたくしたポティダイアの攻擊は四三二年であり、マケドニアとアテナイとの關係は漸く紛糾して來たのである。アテナイに對抗してオリントスの市を後援したのも彼であつた（上六頁參照）。だからペルディッカスの生涯はギリシアの二大勢力の間に折衝しなければならなかつた多難の時代であつた。アルケラオスが卽位した年は丁度スパルタがデケレイア Dekeleia を占領した事であつて、マケドニアは幸にもアテナイの海權の尾大振はざるの時機に際會した。此の好機に乘じて彼はその勢力を固めたものといふべきであつた。

此のアルケラオス王の死よりアレクサンドロス大王の父フィリッポス二世の卽位まで丁度四十年の間に（三九九—三五九年）、九人の王が繼承した。その內、フィリッポスの父アミンタス Amyntas の

前後二十年(三九二—三八四年、三八二—三七〇年)の統治、プトレマイオス及びフィリッポスの兄ペルディッカスのそれ〴〵五年の統治(三六九—三六五年)、(三六五—三五九年)を除けば、十年の間に六ノの王が繼承したわけであつて、一人の統治期間が如何に短いものであつたかが知られるし、又宮廷の陰謀が如何に盛であつたかが想見されなければならない。かくの如き王室の陰謀の由來するところは陰謀によつて容易に政權の奪取が可能であり、從つて王國簒奪が可能であつたことを示すといはなければならない。と同時に支配する王室の實體が極めて脆張微少であり、服屬せる地方君主が強大なる存在として併立し、民衆一般は、凡そ無知にして之等王室大貴族とは全くかけはなれて、唯勞役に服し、彼等が在るといふことは、生物が在るといふことと大差なき狀態にあつたことを暗示する。

マケドニアのフィリッポス以前の生活姿態、制度等に就いては殆んどその史料を缺くがために、直接の描寫は不可能である。かのギリシア文化が吸收されまたその攝受に君主が努力したといつても、それは單に王家の宮廷内に限られたものであり、民衆一般の教養は右の如き事情から極めて低かつたと考へられる。フィリッポス二世の頃においても、住民の大部分は皮裘をまとふて、乏しき家畜群を山岳の間に牧して居たと、アレクサンドロス大王はのべてゐる(Arrianus, Anabaseos Alexandrou VII 9)。

又、マケドニアがアイガイ、ペラ等を中心として發展した頃にも、リンケスタイやエリミオタイな

どの種族(ethnos)はそれ〴〵の王を戴いて獨立の狀況であつた（前掲 Thuk. II 99)。のみならず、マケドニア王室の下にある貴族は、いはゞ封建的君主に等しく、フィリッポスの時代にもその數は八〇〇を超えずして、而も彼等の所領は廣漠たるものがあり、豐饒な大領土をもつ一萬人のギリシア人以上の收穫に匹敵したと傳へられてゐる(Theopompos, Philippica fr. 217 (b). Grenfell & Hunt)。

是等の廣大なる土地を領有する貴族が存在したこと、及び彼等が好んで饗宴を事としたこと(Theopompos fr. 228 等）は、吾々をしてホメロスの世界を彷彿せしめる。獨りマケドニア人のみならず、北西諸族が饗宴を好むことが、恰かも不德の大なるものの如くに傳へられてゐるが(Theopompos frs. 39. 51. 等)、それは種族の性格的な不德ではなくして、文化の低さからくる普遍的なるものである。之等の貴族が hetairoi とよばるゝことともホメロスの氏族制度時代の面影がある。ヘタイロイとよばるゝものは、ホメロスにおいて食卓仲間であり(Odysseia II 225 等)又戰の同士であるが(Ilias III. 47 等)、マケドニアにおいても、それは、フィリッポスの饗宴の仲間であり、アレクサンドロスの頃においてもなほ騎士の部隊をヘタイロイによつて分つて居る(Arrianus III 16)。

かくの如きマケドニアの狀態は、なほ氏族生活の名殘を脫しきらない生活であつて、たとひギリシア文化を移入し、ギリシア的な都市を建設したとはいふものの、ギリシア諸市の生活が自然に發展し段階を經由して、氏族制度が崩壞されて都市生活に入つたものとは同一に論ぜらるべきではない。外

形的に都市が經營されてゐたとしても、生活の實體は、一言にしていへばホメロス的な、卽ち、氏族制度に立脚した諸宮臣の封建的生活であつたといはなければならない。

而も長子相續でない繼承法は、勢ひ子供の間の相續に對する葛藤となり、姻婚制度の寬濶さと、敎養低きものの享樂的生活の放恣とは、閨門の暗鬪となり、所詮はヘタイロイの向背を操縱し、腹心の手兵を養ふといふ方向に進んだのである。だから外國人にして身分の卑賤なるものでフィリッポスの朝廷において主要なる地位を占めたものが少くない。例へばアガトクレス Agathokles の如きは奴隷であつてテッサリアのペネスタイ Penestai（附庸）の一人であつたが、ペッライボイ Perraiboi を支配するに到つた（Theopompos frs. 84）。或はテッサリアのトラシダィオス Thrasydaios も後に（テッサリア）諸種族の王 Tyrannos となつてゐる（Theopompos fr. 202）。

之を要するに、マケドニアにおいては、國民一般の文化段階においてはなほ氏族制度的な時代にあつて、ギリシア文化の移入は唯宮廷の內部にとゞまり、ギリシア人の傳統的に考へた都市國家における生活段階にはまだ進んでゐなかつた。そしてホメロス時代にみるが如き部下の封建的豪族が活動の根幹をなして居り、それ等豪族の中心勢力をなすものは土地であり、勢力の强弱は土地の豐瘠と廣狹とに比例する。此の點において、アイガイ、ペラを握つたものが、是等の地方の中心勢力となつたことは餘りにも明白である。加ふるに王家の私生活關係は、また王家をして之等豪族の一員として大勢力を

養ふの必要をもたせたと考へられる。のみならず西方はイリリア人 Illyrioi 北方はパイオノイ Paionoi があつて、常に抗爭をつゞけてゐたことも、マケドニアの結束を促進した。斯にマケドニア統治は氏族制度時代の高潮期にみる如き、門地を背景とする王政に向つて發展しつゝあつた。時、偶々都市國家的民主政治の無力衰微によつて、素朴なる生活と、力とが要求されて居た時代であつて、マケドニアが新鮮なる時代を荷ふものとして登場しえた一面がこゝにあつたのである。

こゝに一點の注目さるべきことがある。マケドニアにおける王權の確立は、之をケルストの如くマケドニアの人民の性格に歸すべきではあるまいといふことである（Kaerst, Geschichte des Hellenismus I² S. 179）。諸豪族の對立と一豪族の統一とは、むしろ氏族制度的形態から自然の發展であり、之が都市國家的對立に導かれたことこそ反つて部族的對立の均勢、經濟生活の跛行等々ギリシアの特殊事情に由來するものである。マケドニアが王政に向つたことは、一つにはアイガイ、ペラを根據とせる王室が他の種族の間に優越しえたことに由るものである、第二にギリシア諸市が資源と市場とを海外に求めなければならなかつたのとは異つて、隣接地域に膨脹することによつて目的を直ちに達しえたがために、市民各自が自由と獨立とを主張する機會をまつまでもなく、王室を中心として結束することが、より效果的であり、より必要であり、又それが最も自然であつたがために他ならないのである。

六、マケドニアの進出

アルケラオスの死後アミンタスの卽位までは王室は醜惡なる王位繼承の陰謀に終止した。三九二年アミンタスが卽位してもなほ內訌が收束されなかつたのみならず、西方イリリア人の來襲することあつて、或はカルキディケの援助を求め或はテッサリアに助けられ、最後はスパルタと結んで漸くその王權を恢復することが出來た。

此の間アンタルキダス條約は成立したけれども、テバイの不滿は常にスパルタとの抗爭を演じたし、オリントスを中心としたカルキディケ同盟は一時北方に雄飛した。然し三七九年スパルタのためにオリントスが屈して、カルキディケにスパルタの勢力の進行するや、テバイならびにアテナイとスパルタとの抗爭が激化した。マケドニアは此の際スパルタに從つてゐた。

三七一年アテナイとスパルタとの間に和議成立するやマケドニアはアテナイとも良好な關係に入り次いで、スパルタに諸國が會同してギリシアの事を議するやアミンタスの代表者も來會し、アンフィポリスがアテナイに屬すべき旨をといたのであつた。(Aischines. Peri tes Paraprosbeias §32)。アンフィポリスはアテナイにとつてはトラキアにおける一つの根據地であつた。アンフィポリスの市はスパルタのブラシダスが占領して以來アテナイより獨立して居たのだが、今や舊支配權が承認されたわけである。アテナイはマケドニアと結んで北方の舊勢力を恢復せんとしてイフィクラテス Iphikrates を使はしたが、翌三七〇年アミンタス死してその望は中斷されるに到つた。そしてアレクサンドロス

ペルディッカスの二王を經てフィリッポス二世が卽位するまで十年間（三六九—三五九年）にギリシアの形勢は一變し、テバイの制覇時代となり、而も三六二年はマンチネイア Mantineia の戰の年であつて、エパミノンダス Epaminondas 戰死し、テバイの覇業も動搖するに到つたのである。

ギリシア本國における勢力の消長は直ちに北方の形勢に反影した。スパルタに屬したオリントスは昔日の如くではなかつたが、再びカルキディケの同盟を復活した（Beloch Gr. Ges. III₂ S. 14）。だからアテナイがアンフィポリスを確保せんとする運動を阻止せんとして之と同盟する（Schäfer Demos. I S. 94）。一方マケドニア王位繼承の葛藤はアミンタスの妻エウリディケ Euridike をしてアテナイのイフィクラテスに向つて後援を求めしめ、之によつて敵手パウサニアスを追ひ、情人プトレマイオス Ptolemaios の擅權をみた。而もアテナイはその報酬としてのアンフィポリス攻擊に向つて後援をマケドニアから望むことは出來なかつた。それはアテナイの勢力がマケドニアに及ぶをおそれたテバイがプトレマイオスに迫つて、フィリッポスを人質としたからである。かくてギリシア諸市の勢力によつて、マケドニア並びにカルキディケは不安の中にもギリシアの攻擊から安全でありえた。一方マケドニアとカルキディケの勢力の均衡において、アテナイは北方を操縱しえたのである。テバイは海權を握らざる限りギリシアに覇を唱ふるをえなかつたのでエパミノンダスは海軍をつくつてヘレスポント

に航し、アテナイの同盟市を屈服せしめたけれども、凡ては彼の死と共に終つた。かくしてマケドニア、カルキディケ、アテナイが勢力の均衡を保つ秤量であつた。その一角の崩壞は均衡の破裂でなければならなかつたのである。

テバイの覇權の失墜は、直ちにペルディッカスの態度にあらはれて、彼はアテナイと同盟した。而もアテナイが極力恢復に努めてゐるアンフィポリスを保護してアテナイの攻擊を不可能にした（Aischines Peri tes Paresbeias 30）。かくの如きはマケドニアの勢力の充實を語るものであつて、關稅受負額を二十タラントンより四十タラントンに倍加する等の改革によるものであらう（Pseud Aristoteles, Oeconomica II. 1350ᵃ 16-24）。彼が父アミンタス以來の宿敵イリリア人に戰を挑んだのも、たとひそれは失敗したとはいへ、又充實した力のあらはれである（Diod. XVI, 2）。

此のイリリア人との戰においてペルディッカスは戰死したので弟フィリッポスが卽位した。彼の名聲はアレクサンドロス大王のためにおほはれてはゐるが軍人としてまた政治家として傑出した王である。テオポンポスはエウロパにかつてかくの如き王は出たことがなかつたと傳へてゐる（fr. 26）。

フィリッポス卽位のはじめにあたつては、前王ペルディッカスの頻々たる征戰のために國帑疲弊して居たのみならず、國內においては幾多の王位要求者があつた。プトレマイオス、ペルディッカスと爭

つたバウサニアスはトラキアのコチス Kotys に助けられてフイリッポスに對立せんとし(Diod. XV. 2)、又アミンタスがイリリア人に敗れて亡命した間に王位についたアルガイオス Argaios は (Diod. XIV. 92) アンフィポリスから守兵を撤してアテナイの歡心を求め、その後援によつて王位を要求してゐた (Diod. XV. 2-3)。外には西はイリリア人、北はパイオニア人、南はアテナイ人が動いてゐた (Diod. XV 2. Justin. VII 6)。

イリリア人はアドリア海方面に良港をもち、沿海地方は氣候も溫暖であり地味も亦肥沃でオリイヴ葡萄を產するのであるが、住民の生活がなほ之を活用するに到らなかつた。然し山地の方面は山岳重疊し、氣候も寒冷であつて時々雪に覆はれ葡萄も亦稀にしか產出しない。(Strabon VIII c. 10 p. 316) かくの如くであるから、彼等にとつては海上に發展することが自然であり、わざ〳〵山をこえてマケドニアに進出することはむしろ不自然に近いのである。從つてイリリア人に對しては、マケドニアは之が進出をくひとめれば好いのであり、マケドニア自身の發展からみれば、强ひて事を起さないでも好かつたのである。

パイオニア人はマケドニアの北方山地に住する。アクシオス河は兩者の境界として侵入を困難にしてゐるのであるが (Strab. fr. 4)、彼等はかつて此の流域をも海岸までもつてゐたに相違ない。ミグドニ

ア Mygdonia はその領土であつたといはれるし(Str. fr. 41.)、フリギア Fhrygia 人の植民地であつたとか、トロイアに從軍したとかといふ傳說からみても海岸までのびてゐたことが推測される(Str. fr. 38)。又山地オレステイア Oresteria がペラゴニア Pelagonia と稱せられ、ペラゴニアからピエリアまでも領有してゐたと傳へられるのであるから(Str. fr. 38)、アクシオス河を境界線としてゐた時の情況と併せ考へれば勢力が次第に局限されて行つたことが推定される。果して然りとすれば、北方からの脅威はいはゞ末期的のものであつて、新興の勢力ほどに恐るべきものではなかつた筈である。

之等の外敵に比して恐るべきは何といつてもアテナイであつた。彼等は、ピドナ、メトネを西海岸にもち、マケドニア本國を脅してゐるのみならず、カルキディケを完全に掌握することになれば、マケドニアは完全に海上へは鎖されなければならない。又バンガイオンを中心としてストリモン河の東より西はバイオニアの地域は鑛產にとみ、バイオニアの如きは耕作する間に金塊が發見されたと稱せられる(Str. fr. 34)。此のストリモンの中流は既にのべたる如くマケドニアの手に歸して相當の收益をあげてゐたのである。之に對してアテナイはアンフィポリスを中心として之等の鑛產を確實に保有せんとして居るのであつて、此の點においてもアテナイはマケドニアの發展と利害が交錯する。マケドニアはストリモン下流域に出ることによつて收入を確實にし、カルキディケを支配することによつて、海上への發展が安全になり完全になるのである。アテナイにとつては之等を確實に握ることによつて

マケドニアを抑制しうるのみならず、黑海への糧道と、造船材の供給と市場とを確保しうるのであつて、アテナイ存亡の係はるところである。卽ちカルキディケとストリモンの流域、換言すればアンフィポリスとオリントスとは、アテナイにとつても、マケドニアにとつてもいづれも確實に領有することが、一國の生命を支配するわけであり、同時に之を爭奪することによつて他を壓倒しうることになる。こゝにおいてマケドニアにとつて最も恐るべき敵手は實にアテナイであつたといはなければならない。

かゝる內憂外患に對しては、ケルストの言つてるやうにマケドニアには先づ軍事的統一が、次で政治的統一が緊要であり、またアテナイの勢力から獨立するためには經濟力の發展が必要であつた(cf. Kaerst, Ges. des Hellenis. I² SS. 192—3)。

戰は人間と人間との鬪爭であつて、容貌の怪偉にして怒號の猛烈なるだけでも敵手を畏怖せしむるに足るのである。此の點は文化の粗野なるものが洗練されたるものよりも有利である。此の點イリリア人マケドニア人はギリシア人よりもまさつてゐた(cf. Thuk. IV 126, 5)。此の人間の野性を人間の知性が克服する所以のものは武器の精練と組織と訓練とである。歩兵よりも重歩兵 Hoplites が、重歩兵よりも騎兵が卓越するのは此の點であつた。マケドニア、テッサリア等の騎兵は早くよりきこえ

て居たが (Hdt. VIII. 138 Thuk. II 22. 2)、用兵の法に於て未だ之が十分なる機能に使用せられてゐなかつた。マケドニアの山地エリメア Elimea のデルダス Derdas の騎兵驅使の姿は (Xen. Hell. V. 3. 1-2)、明かに騎兵訓練の習熟を示してゐる。騎士 Hippeis は昔は單に騎者の集團を形成したのであつた。今や騎士の隊が明確に組織されたことは一の大なる進歩であつて、フィリッポスの仲間 Hetairoi は此の騎兵の中堅をなすものであつた。彼が騎兵を尊重したことは、それをえんがためにテッサリアの攻擊を企ててゐることをもつても考へ及ぶところである (Justin. VII. 6)。かくの如く組織されたる騎兵隊は從來步兵の補助として防禦的であつたのに對して (Bauer, Die griechischen Kriegsaltertümer S. 410) 敵の步兵を破壞する目的をもち攻擊力の主體をなすに至つた (Delbrück, Geschichte der Kriegskunst I³ SS. 171-2)。

又有名なる方陣 Phalanx はフィリッポスによつて初められたと傳へられてゐる (Diod. XVI. 3)。此の記載は彼がトロイアの密集部隊に範をとつたとある如く、既に方陣の存在は相當古くからみとめられる。而して從來右翼を强力なる部隊とせる戰術に對し、エパミノンダスは方陣をもつてそして之を味方の左翼に配置することによつて、敵の强力部隊に對抗する新戰術としたのであつた。此の點において方陣が防禦的に有效なるのみならず、進んで攻擊的に轉化したといひうる。そしてサリサ Sarissa (Sarisa を正しといふ Birt, Alexander der Grosse S. 32) と稱する五・五米の長槍をもち槍襖を形成す

る。その槍が長きが故に後列の者の槍すら直ちに敵に向つて攻撃を加へうるのであつた。

歩兵においてもペツェタイロイ Pezetairoi といふものがある（Arrian. VI. 6）。之は「歩兵のヘタイロイ」の意味であつて、農牧者から成る。而して騎士たるヘタイロイが、王の側近の共に饗宴をする仲間であるに對するならば、同樣に、歩兵のヘタイロイたるペツェタイロイ、卽ち農牧者が、王と密接な關係をもつてあらはれて來たことが注目される（Wilcken, Alexander der Grosse S. 22）。卽ち軍制の上の改革は、同時に農牧者が王と密接に結合されて來たといふ點からみて、又、さきにのべたる如く、外國の卑賤なるものをも重用したことゝ考へあはせて、それは同時に社會的に興味深き變化であつたといはなければならない。

又ヒパスピステス Hypaspistes は楯持の意味であるから、本來は豪族に從ふ從者であつたらう（cf. Xen. Hell. IV 8. 39）。それがアレクサンドロス大王の頃には獨立した部隊を形成してゐるのであるから（Arrian. Anab. III. 29. 7）、丁度イフィクラテスがペルタスタイ Peltastai を編成した例に從つたとみることが出來る（Kromayer, Heerwesen und Kriegsführung der Griechen und Römer S. 99）。卽ち輕快なる歩兵も亦編成されたのである。

かくの如き兵種の變化は直ちに戰術の變化を豫想するものであり、又武器武裝の變化したことも當然なことでなければならない（cf. Kromayer, SS. 108—110）。かくして戰術は徹底的に敵手を倒す傾

向をとり、攻城の術においても消極的に兵糧を以て屈服させることから轉じて直接、積極的に攻めおとす方針に向つた。或は又冬期も夏期と同樣に、夜間も晝間と同樣に進動する方策をとつたことも自然であり、訓練を尊ぶことも亦自然である(cf. Wilcken, Alex d. Gr. S. 29)。卽ちマケドニアの軍事は從來のギリシア戰法とは全然面目を新にしたといふべきである。かくて、藝術的にも社會的にも著しき變動をみたヘレニズム時代における革新の、軍制的方面は、正にマケドニアによつて起されたといつて好い。素朴强健なるマケドニア人が、新たなる組織を以て訓練されたのであるから、唯この上は實戰の經驗をだに重ぬるならば、マケドニアの軍隊がギリシアの市民兵と傭兵とに對してその優越すべきことはあまりにも明白であつたといはねばならぬ。

さてフィリッポスは、北方のパイオニア人と和し、トラキアに自ら赴いてパウサニアスを後援せざらしめ、アルガイオスに向つた(Schäfer, Demosthenes und Seine Zeit II² S. 17)。先づアテナイの援兵マンテイアス Manteias を破り、俘囚と分捕品とを返した(Justin. VII. 6)。又アテナイがアルガイオスを援助する所以はアンフィポリスの領有を欲したからであるので、此の市からフィリッポリスは守兵を撤退した(Diod. XVI 3)。アテナイは大に喜び交通を復活した(Demosth. c. Aristokratis 660) 之はフィリッポスの外交手腕の非凡なことを示すのである。

フィリッポスはバイオニア人の王アギスが死せるに乘じて之を從へ直ちにイリリア人に向つた。そしてバルディリス Bardylis 王の和を斥けて之を擊破しリクニチス Lychnitis 湖東の地を恢復し、モロッソス Molossos のオリンピアス Olympias を娶つて政略的結婚をした。更にテッサリアに侵入してラリッサ Larissa を陷れその騎兵を幕下に集めることが出來た(Justin. VII. 6. Diod. XVI 4 & 8)。かくてマケドニアの軍隊は實戰の經驗を豐富にしたのみならず、古來有力なるテッサリアの騎兵を利用しうることになつて兵質はいよ〳〵堅實を加へた。加ふるにイリリア方面はモロッソスの勢力と結んで牽制しうることになつた。卽位後の難境を電光の如くに打開しえたのである。

內外の情勢ほゞ定まつて後はマケドニアが獨自の立場に立つて進むことは時機の問題であつた。マケドニアはまづ海上に出ることを劃策すべきであり、こゝにアテナイとの競爭が開始される。

先づ彼は國內の富を充實する意味を含めてストリモン流域に着眼してアンフィポリスを圍んだ。此の地はまたトラキアへの交通路の中心である。既に兄ペルディッカスが占領したことによつてもマケドニアにとつての重要さが明かである。之に先き立つてアテナイと密約を結び、アンフィポリスをアテナイに恢復し、代償としてピドナ Pydna を獲得することゝした(Theopomp. fr. 165)。アテナイは之によつて、彼等のためてフィリッポスがアンフィポリスを攻擊するものと信じた(Dem. Olynth. II.

6. c. Aristokratos 116)、之によつてカルキディケ方面のアテナイ同盟諸市の背反することを避けつゝ目的に向つて進んだのであつた。之がためにアンフィポリスからはヒエラックス Hierax とストラトクレス Stratokles とを送つてアテナイに歸服を申出たがアテナイは之を斥けた (Theopompos fr. 43. Dem. Olynth. I. 8)。蓋しアテナイにとつては、いづれにしてもアンフィポリスは自分の手に歸すべきものと信じたがためであり、また二つにはアテナイの海上同盟は、カリアのマウソロス Mausolos のために動搖して之に力を注がねばならなかつたがためである (cf. Beloch, Gr. Ges. III, SS. 236-240)。かくしてフィリッポスはアンフィポリスを手に收めたが、此のトラキアにおける樞要なる地位は、やがてマケドニアの擴大に向つての貢獻絶大なるものあるを思はしめる (Diod. XVI. 8)。されば、かねてタソス人が建設したクレニデス Krenides の市に來援し、自國の民を多數移住せしめてフィリッポイ Philippoi と改めたのも、此の頃のことである (Diod. XVI 3)。之は自國民の生活に融通せしむるところあるとともに、必ずやトラキヤ征服についての重要な意義ありしに相違ない。かのアテナイの軍事植民地 Klerouchia と對照會得さるゝところである。その他、タソス人は對岸に植民し、ダトス Datos などにて盛に採掘してゐたが、之等も固よりフィリッポスは占領した。又ヘブロス Hebros 河からは砂金がとれたが、彼は河を乾して新しい方法で之を採取したと稱せられる。殊に從來產額の乏しかつた此の地方の鑛山の經營法を改善したため年額一千タラントン以上の收益をあぐるに到り、マケドニ

アの富は異常なる增大をみたと稱せられ、又之によつて金貨を鑄造するに到つたのであつた（Diod. XVI 8）。

此の際におけるオリントスの行動は明かではないけれども、トラキアにマケドニアが確實なる地位を占むることは、地をへだつるアテナイの手にあるよりもより危險である。然し此のアンフィポリス攻圍の際オリントスが如何に活動したかは明かではない。一方フィリッポスはアテナイとの約束の如くピドナを得んとしたが、アテナイが之を欲しなかつたためであるか否かは不明であるが兎に角武力をもつてピドナを占領するに到つた。之がためにオリントスは一層の恐怖を懷いたことは察するに難くはない。之がためにフィリッポスは、かねて人口過剩になつたオリントスが切望してゐたポティダイアをアテナイから奪つてオリントスに與へ、之によつて他意なきを示し、又アンテモス Anthemos 地方をカルキディケにさいて同盟した（Diod. XVI 8 Dem. II Philip. 20.）。かくして勢力の均勢はマケドニアに有利に傾きはじめた。殊にアテナイの勢力をポティダイア及びピドナから驅逐し、更にカルキディケと親和關係を結んだから、マケドニアは一躍して海上にも十分なる保證をしたわけであつてトラキアの海岸までその勢力を張りうることとなつたのである。加ふるに、オリントス、マケドニアの聯結は、カルキディケ方面においてアテナイに服屬を餘儀なくされてゐた市々を離叛せしめた。トロネの如きはその一つである。かくの如く此の方面においては、アテナイに對抗する力としてオリント

スをえたがために、マケドニアは自分の全力をあげて他に向ふことが出來たのであつて、カルキディケ、アテナイ、マケドニアの均勢が、マケドニアの優越に終るべきことは今や時の問題に還されたのである。

此の時にあたつてアテナイは軍費は涸れ、同盟の爭に疲れ、フィリッポス膺懲の軍を何人に委ねるべきかをさへ知らなかつた(Aischines, Peri tes Parapresbeias 20)。軍費は既に早くから將軍に十分に行きわたらなかつたので、將軍自らが軍費を捻出しなければならなかつた(Dem. Peri tou en Chersoneso 21—26 等)。チモテオス Timotheos がオリントスを攻めた時の如き銅貨を鑄造して軍隊に支拂つたり(Pseud Arist. Oeconomica II_2, 1350a, 24–29)。或は彼が軍費相當の額を占領地から國庫にもたらして償としてゐる有樣であつた(Justin. XIII. Timoth. 1)。かくの如きであるから軍の行動は自然不活潑であり、而も短見なる政治は豫め事にそなふることが出來ず常に事が起つてから善後策に腐心するといふ有樣であつた(cf. Dem. I Philip. 41, 46 Cherson. 13 等)。

三五六年ポティダイア、バンガイオンをとつた時にアレクサンドロスが生れた。此の後二年フィリッポスは餘り熱心に戰をしなかつた。專ら內政と財政とをととのへたのであらう。

フィリッポスが海岸に進出したこと、ストリモンの流域を手に收めたこと、殊にバンガイオンの鑛

區を獲得したことは、全くマケドニアの發展の一轉期であつた。アンフィポリスをえて此の時はじめて海軍を建造する必要にも迫られ、豐富なる材料と資金とをもつて着手したことと思はれる。勿論當初は微力ではあつたけれども、然し間もなくアテナイの海軍力をも凌ぎフィリッポスの助勢なくしてアテナイは海上を守りえないとさへいはれる（Dem. Halonnesos. § 14. § 16）。又レムノス、インブロス、スキロス等アテナイの主要なる海上根據地をも覗ふに到つた（Aischines, Parapres. § 20）。

又此の鑛區からの富によつて多くの傭兵を備へることが出來たから、國民兵と共に陸軍は彌々强大となつたわけである（Diod. XVI 8）。更に此の資金を流用して列國の內訌を助長させるに成功した（ibid）。蓋し彼がテバイ滯在の間にあつて、ギリシャ都市國家間の黨爭が如何に激烈であるかを認めたためであるが、之によつて將來の外交においてフィリッポスが成功をおさめるに至つたのであつた。今やかつてペルシャの富がギリシャに動きかけたと同樣の作用が、マケドニアによつて演ぜられることになるのである。

更に是等の軍備、外交へ向つての進展の他に、彼がフィリッペイオス Philippeios と名けられる金貨を鑄造したるのもバンガイオン地方の富に由來する（Diod. XVI 8）。從來東部地中海方面にはダレイコス Dareikos とでペルシアの貨幣が行はれてゐた。之に代つたフィリッペイオスは表面にはアポロンと月桂樹を刻してあり、カルキディケ貨幣の樣式にならつたものと思はれる。その實質はカルキディ

ケのそれと同じく、フォイニキア、小アシア的單位に從つてゐた。かくしてマケドニアが獨立した經濟生活に入ることが明かになり、又その經濟的政治的地位が、間もなくマケドニア、トラキア沿岸に確立し、アテナイやペルシアの勢力に對立しやがて之等を凌駕する傾向を明白にした(Kaerst, I² SS. 210–212)。

之を要するに、なほ未だアテナイの勢力と直接的に衝突することは之を回避するかにみえたけれども、又カルキディケ諸市に向つてもなほその歡心を求むるかにみえたけれども、アンフィポリスを占領したことによつて、マケドニアが軍事的經濟的にトラキア、カルキディケ、テッサリアに亘つて指導的地位を占め、實勢力においては既に衰滅期に入れるアテナイを遙かに追ひぬいてゐたことを示してゐる。

此のマケドニアの實勢力の充實は、トラキア、バイオニア、イリリア等の隣接國の不安を惹起したことは當然であつて、彼等はアテナイと同盟し(Dittenberger Syllog. 2 114)。フィリッポスに當らんとしたが、その戰備ととのはざるに先つて個々に屈服するの餘儀なかつたのである(Diod. XVI 22)。

マケドニアの內部が充實してからフィリッポスはテッサリアへ侵入の機を覗つてゐた。既に南部マケドニアにおいてはピドナを占領して海岸における一つの地盤はもつたけれども、メトネがなほ殘つ

てゐてマケドニアへの突擊地點をなしてゐた。

偶〻所謂神聖戰役によつて、テバイはフォキスと事を構え、スパルタ、コリントス、シキオン、メガラ、アテナイ等は、いづれもテバイに對抗する意味でフォキスを助け、中部ギリシア及びビザンチオンはテバイに組し、ギリシアは再び二分して戰亂に陷つてゐた。その機に乘じてフィリッポスは遂にメトネを占領したのである(Diod. XVI. 31, 34)。

此の時ラリッサはフェライ Pherai の僭主と事をかまえて居たが、フェライはフォキスと結んで强力であつたので、マケドニアのフィリッポスに援助を求めた。フィリッポスは好機到れりとして侵入したがフォキスのオノマルコス Onomarchos に敗れた(Polyainos II 38)。然し之に屈せずして翌年遂に之を破つてバガサイを占領し(Diod. XVI. 31. 35)、テッサリアの諸市は風を望んで投降したので之によつてテッサリアもほゞフィリッポスの勢力圏内に歸することとなつた (Diod. XVI 14)。更に此の時彼は恰も「神の使の如く、宗教の擁護者」であるかの如く考へられたのであつて一擧に南下するの形勢さへみえた。それは不幸にして成功しなかつたが (Justin. VIII. 2) 然しテッサリアにおいては市場や港の關稅を收納することになつて財政的には彌々惠まれることになつたのみならず(Dem. Oly. I. 22)、精神的にも既に覇者たることの信念が自他の內部に植ゑつけられて來たのである。

かくして多年南下の懸案もテッサリアの屈服によつて解決の一端をつかむや、フィリッポスは又轉じてトラキア方面に進出した。トラキアの海港からの收入は平均三〇〇タラントンを下らない程であり(Dem. Aristok. § 110)、且つストリモン、ネストル河畔まで出たマケドニアにとつてはヘレスポントに陸上から進むべき自然の膨脹過程である。

トラキアにはコチスの死後ベリサデス Berisades アマドコス Amadokos ケルソブレプテス Kersobleptes が爭つてゐた(Dem. Aristok. § 8)。ケルソブレプテスは、アテナイに接近し、ケルソネソスにおいてカルディア Kardia を除いた他の諸市をアテナイにさき、その移民を許してゐた(Diod. XVI 34)。アテナイはかくて樞要なるケルソネソスに實勢力を扶植することが出來た。之がためにケルソブレプテスの反對者はビザンチオン、ペリントス Perinthos の市及びアマドコスなどであつて、從來アテナイと親善なる關係にあつたのが變じて今はフィリッポスに接近することとなつた(Aischin. Parapres. 81 Scholia)。フィリッポスはテッサリアを收めてから轉じてトラキアに向ひ(Dem. Olynth. I. 13)、ペリントス附近のヘライオン Heraion を圍んだ(Dem. Olynth. III 4)。ヘライオンはアテナイにとつては穀物貿易の要衝に當るので、アテナイは大に驚き國論は沸騰した。而も徒らに議論を重ねて出兵の事迅速に陟らず、僅に寫眞を送らんとした時にフィリッポスが病むや直ちに出兵を中止してしまつたのであつた(ibid. 4-5)。かくの如く逡巡として決せざる間にマケドニアはトラキア海岸に

勢力を振張するし、ビザンチオンはカルケドン Chalkedon やセリンブリア Selymbria を壓迫し、(Dem. Peri tes Rhodion Eleutherias 26)、フィリッポスとビザンチオンとの提携は更にキオス、ロオドスとをマケドニアに親密ならしめた(Theopomp. fr. 158)。而もアテナイは徒らに憤るばかりで如何ともなしえなかつたのである(Dem. Philip. III. 35)。

かくしてフィリッポスの勢力は南はテルモピュライから東はトラキアの海岸に確立した。その地の有する經濟的軍事的な地位がマケドニアをして全ギリシアの何れを以てしても抵抗しえざるだけの勢力を具現せしめた。マケドニアは他國に資料を仰ぐことなくして、完全に自立しえたのに對して、アテナイの如きは完全に脅かさるることになつた。カルキディケの如きは、今や東西北の三方からマケドニアに包圍されてしまつた。今はカルキディケがマケドニアの同盟であるといふことは單なる紙上の空文にすぎない。それが實質的にマケドニアに含まるゝ日は、唯時間を以て切迫して來た。

かゝる形勢においてオリントスが不安を感じたのも蓋し無理ではない。彼等は再びアテナイに親和的態度を示して來た(Dem. III. Olynth. 7)。アテナイ亦之を利として提携した (Dem. I Olynth. 7)。フィリッポスハ異腹の兄弟が叛いたのを庇護したといふのでオリントスに攻め入つたといはれるが(Justin. Viii 3)、その理由は戰はんとする意志の粉色にすぎぬ。是より先、既にフィリッポスは諸國に

黄金を散じてゐたので諸國には新マケドニア黨が形成されてゐた (Dem. Cherson. § 66 §69 等)。オリントスにおいてもラステネス Lasthenes エウチクラテス Euthykrates 等は急に富み家は豪奢となり家畜の頓に增加するのをみた(Dem. Parapresbeia, § 265)。之等は王室の富、掠奪、金山による富を散じたもので(Diod. XVI. 8)、テッサリアの關稅收入も相當であつた(Dem. Olynth. I. §22)。かくして衷心マケドニアとの提携がオリントス存立のためにやむをえずとするものを生すると共に、籠絡されたる叛逆者は遂に强硬論者アポロニデス Apollonides を追放するに到つたのである(Dem. Philip III §56)。是においてフィリッポスは機到れりとしてまづカルギテイケに軍を發したのであつた。

卽ちまづスタゲイラ Stageira を攻めて降し(Diod. XVI. c. 52)、アポロニアを破壞し(Dem. Philip. III § 26)、かくして或は破壞し或は贈賄してその足並みを亂しつゝ(Dem. Parab. § 263)カルキディケの諸市を滅したのであつた(ibid. §266)。オリントスは一方アテナイと同盟すると共に他方フィリッポスにカルキディケ侵入を詰問したらしい。然し常に他意なきを示しつゝ(Dem. Olynth. I §4)、四十スタディオン(二里强)の地に迫り、初めて假面を脫いで、「人々がオリントスを去るか、自分がマケドニアを去るか」であると唱へたるのである(Dem. Philip. III c. 11)。

アテナイはオリントスから求援の使をうけるや善後策を講じ、一般に之を救ふべしとなした。デマデス Demades はマケドニアから贈賄された辯士であつて彼のみが反對した(Blass. Die attische Bere-

dsamkeit III_2 S. 268)。デモステネスの第一第二のオリントスに關する演說は此の時のものであつてアテナイはカレス Chares の下に三十隻の三段櫂船 trieres と二千人の傭兵を送つた。(Beloch, Gr. Ges. III_1 s. 494)。然しフィリッポスはエウボイアの內亂を助成して(Dem. Philip. I §37)、アテナイを牽制した。

その間に第二回の使者がオリントスよりアテナイに送られ事態の急を告げたので當時ヘレスポントにあつたカリデモス Charidemos をして四〇〇〇人の傭兵と、一五〇騎をもつて救援せしめ、オリントスはやゝ頽勢を轉恢することが出來た(Shäfer, Demos. II^2 SS. 139–141)。

フィリッポスは然し乍らシトネ半島に入つてトロネを從へ、オリントスの海港メキベルナイを奸策を以て奪ひ、大軍を以てオリントスを圍んだ。オリントスは最後の奮戰を試みたが再敗して籠城した。フィリッポスはアテナイからの後詰の來らんことを慮り强引に攻めたてたが兵を損するのみであつた。然し海港を奪はれたオリントスには、來援の道がたゝれてゐた。のみならずフィリッポスは、かねて買收せるエウチクラテス及びラステネスの裏切によつて騎兵を破り、次いで之を陷れたのであつた(Diod. XVI 53, Dem. Parapres § 267)。

フィリッポスは、カルキディケに入つて一年たゝぬ間にオリントスに入城した。かつてはスパルタの軍隊を斥けたオリントスが脆くも落城したのである(Dem. Parapres § 264)。全ギリシアは驚き殊

にアテナイ人は恥ぢ且つ恐れた。オリントスを救はずんばマケドニア軍が國境に至らんと言つたデモステネスの言葉を思ひ出した。然しながらオリントスを陷れたマケドニアは完全に北方の主となつた。今はアテナイが如何に強大なる海軍力をもつとしても此の北方の力を動かすことは出來なかつた。ギリシア都市國家の最後の奮鬪を試みたデモステネスの力も、北方の未開族の統一王國に向つては無力であることが示されねばならなかつた。否それは未開なものではなく、今は傭兵にとつても文人雅客にとつても、フィリッポスの宮廷は憧憬の的となつたのであつた (Diod. XVI, c. 55)。フィリッポスは單にマケドニアの王ではなく、全ギリシアは此の人の許に雌伏したのである。

かくして三四八年オリントス陷落は、完全にカルキディケの屈服したことを示し、都市國家がマケドニアの統一的勢力の前に無力であつたことを暴露した。而もマケドニアの勢力が單一の國としても自給自足しうるものであつて、その勢力の發展はいづれも一味同化的であつた。從來のギリシア都市の膨脹が同盟的に異質者をもつて聯結したものとは趣を異にした。その統制と機構とにおいて、その物資の自給的なる、その文化内容がギリシア的統一を含んでゐることにおいて、完全にして十分なる統一王國としてあらはれた。都市國家の末路尾大振はざるの時、ギリシアの將來を荷ひうる力として完全に北方を併呑して全體の威容を示した。オリントスの陷落は、地域的に統一を完成したものであると共に、實質的にアテナイの勢力を凌駕し、アテナイの覇者としての地位を拒否したものであつ

た。マケドニア、アテナイ、オリントスの對立によつて勢力均衡が、完全にマケドニアの優越に終つたことが、ギリシア將來の指導的地位をマケドニアに保證したとするならば、オリントスの陷落はギリシア民族の運命の一轉機であつたといはなければならない。（完）